賢者は歴史に学ぶ

日本が「尊敬される国」となるために

渡部昇一 Watanabe Shouichi
岡崎久彦 Okazaki Hisahiko

crest

賢者は歴史に学ぶ

日本が「尊敬される国」となるために

渡部昇一
岡崎久彦

クレスト社

賢者は歴史に学ぶ
日本が「尊敬される国」となるために

平成9年3月18日　初版第1刷発行

著者　渡部昇一（わたなべしょういち）
岡崎久彦（おかざきひさひこ）

発行人　●打田良助
発行所　●株式会社クレスト社
〒162　東京都新宿区改代町42
☎03(3260)0963(営業)
☎03(3260)0950(編集)
印刷・製本　●中央精版印刷株式会社

万一、落丁・乱丁がありました場合は、お取替えします。

© Watanabe Shouichi & Okazaki Hisahiko, 1997
ISBN4-87712-052-1　C0021
Printed in Japan

まえがき

今から四〇年前のオクスフォードで、一人の日本人が噂になっていた。なんでもケンブリッジに留学していた日本人があまりにも優秀だったので、教授たちが舌を捲いていた、というのである。ケンブリッジの俊秀の噂がオクスフォードまで聞こえてくる、ということはそうざらにないことであろう。しかも日本が敗戦して一〇年そこそこ、「いまだに戦後」と言ってもよい時代の話である。旧敵国に来て、少しは肩身の狭い思いをしていた日本人として、私にとってまことに嬉しい話であった。

その優秀な日本人は、外務省から来ていた留学生だった。名前も聞いたが忘れていた。ところが最近確かめてみると、その留学年代からしてケンブリッジで噂になった秀才日本人は、岡崎久彦氏なのである。

以前から岡崎氏の著書はたいてい読んでいる。最初のころに韓国について書かれたもの（『隣の国で考えたこと』中公文庫）も、当時としては類書のない、優れたものだった。

唸ったのは、陸奥宗光の伝記（『陸奥宗光』上・下　PHP文庫）だった。斬人斬馬の切り口を見せる谷沢永一氏と、二人で感嘆しながらこの本を対談書評したことがあるのを思い出す。しか

も、この本がサウジ・アラビア大使の時代に書かれたものであることを知れば、岡崎氏の歴史についての著述、歴史への洞察は、よき時代の、よきイギリスの教養人の歴史著述と相通ずるものがあることが、よく理解される。岡崎氏の中には、このような形でイギリス的教養のよさが生かされていると思う。

岡崎氏は「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」という言葉を（ビスマルクの原文では「賢者は」ではなく、「余は」だと聞くが）しばしば引用されるが、岡崎氏はまさにその精神を体現した貴重な人ではないか。

また、岡崎氏と個人的にも話し合う機会を持つようになってからよく分かったことは、岡崎氏が最もよき意味での国士であること、憂国の情がきわめて深い人であるということである。

明治の日本人で、日本の外交官の憂国の情を疑った人はいないであろう。しかし、今では国益より省益、省益より私益という印象を与える外交官の話がないでもない。岡崎氏はその点、まさに陸奥宗光の憂国の情と、その明敏な洞察を受け継いだ人であるように思われる。オランダの歴史の教訓や、戦略的思考を語る岡崎氏のバックボーンは、日本に対する愛情からである。

岡崎氏と私は同じ昭和五年生まれではあるが、稟質も経歴もまったく違う。

しかし、同じ歳の日本人の男として、ツーと言えばカーと通ずるところがある。同じ教科書を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

使い、同じ唱歌を歌い、同じ少年雑誌を読み、同じニュースを聞いて育ったのだ。戦前の偉大な日本の記憶もあるし、戦争に引き込まれていったプロセスも、敗戦の屈辱も悲惨も、また戦後の解放感も、焼け跡からの復興も知っている。わずかのことで戦場には出なかったので、かえって「敗れて腰が抜けた」ような日本人にもなっていない。占領軍や日教組の反日的教育も受けていない。

「こういう世代は貴重なんだ」と岡崎氏は言う。たしかにそう言えば、私の尊敬する著述家の多くの人たち、たとえば五〇音順に並べただけでも、石井威望、小室直樹、日下公人、谷沢永一……と思い浮かぶが、いずれも昭和五年前後に生まれた人たちである。

この昭和五年生まれの人間の、国を憂える気持ちと日本近代史についての積年の考えを率直に語り合おうということになって、本書が生まれた。

いつもながら、岡崎氏の経験と洞察には教えられることが多かったことに感謝している。また、この企画を実現させてくださったクレスト社編集部の労を多とする次第である。

平成九年　立春の日

渡部昇一

目次

まえがき（渡部昇一）　1

一章　「国家の品格」が、国民の運命を決める……11
――日本の繁栄回復のために、何をなすべきか

「国家の品格」を作るものとは　12
歴史教育の〝鉄則〟とは　15
今や日本は三流国家になった　17
なぜ、日本の大学は依然として「左翼の巣窟」なのか　21
日教組世代が日本を動かす危険　24
官僚、ジャーナリストに日教組世代が多いわけ　26
なぜ、「従軍慰安婦」の幻は復活したのか　33
謝罪外交の原点を作った朝日新聞の「大誤報」　38
なぜ、宮沢官房長官は「謝罪」したのか　42

戦中派が「戦争呪詛派」になった理由　46
戦争呪詛派と日教組世代がタッグを組んだ教科書問題　50
日本のマスコミこそが、対外摩擦の火元　52
東南アジアの「反日」は華僑の専売特許　55
なぜ、スリランカのエリートが反日家になったのか　57
ナチス・ドイツからの類推で作られた「南京大虐殺」の幻　62
私有財産の否定が「国家の品格」を損なう　64
厚生次官が不正蓄財に走った「語られざる理由」　66
「お国のため」という言葉が消えた戦後日本　69
税金の無駄遣いが官僚の老後を支えている　71

二章　賢者は歴史に学ぶ……79
――「日英同盟」が示唆する「日米同盟」の在り方

今も変わらぬ日本の地政学的環境　80
日本の孤立を招いたアメリカの保護貿易　81
日英同盟があれば、二・二六事件もなかった　84

ラスト・チャンスは第一次大戦にあり　87
なぜ、日本陸軍は欧州派兵を拒否したか　88
イギリスから見放された日本の命運　90
日英同盟潰しを狙ったアメリカの意図　92
日英同盟を〝紙屑〟と交換した日本　94
歴史が教える「ともに戦うこと」の意義　95
なぜ、アメリカは韓国に好意的になったのか　97
米ソ同盟を目論んだシェワルナゼ外相の深慮遠謀　99
湾岸戦争こそ、日本の安全保障の〝危機〟だった　100
日英同盟をもたらした日本軍の活躍　101
イギリスが日英同盟から得たもの　106
日米同盟破棄がもたらす「悪夢」　108
戦前日本が開戦に追い込まれた理由　109
日米同盟に水を差した「沖縄問題」　113
わずか〇・二パーセントの反戦地主　114
沖縄基地問題は、社会党の内紛だった　117

このままだと、日米同盟は空中分解する 118
集団的自衛権こそが、最後のハードル 122
アメリカ世論が日本を見放せば、打つ手はない 124
国連憲章でも認められている集団的自衛権 126
平和主義者が戦争を招く 133
「臥薪嘗胆」を合い言葉に軍拡路線を進む中国 136
日米同盟があれば、中国は暴発しない 138
東アジアの平和も日米同盟が鍵 143

三章　国民を幸せにする人材の条件 …… 147
——「清貧」を政治家・官僚に求めてはならない
日露戦争直後に「日本の運命」は決まった 148
井上馨が描いた驚くべき「満州経営プラン」 151
「ロシアの実力」を認識していた日本軍トップ 152
なぜ、キッシンジャーは自衛隊を過大評価したのか 154
ハリマン提案拒絶で始まったアメリカの「反日」 155

小村寿太郎の「虚像」 158
とめどないロシアの領土拡張欲 160
終生、借金に悩んだ男 165
国家戦略を理想論で語るなかれ 168
なぜ、井上馨は財閥育成に熱心だったか 169
ユダヤ人を首相にした大英帝国 173
幣原外交を潰した青年将校たち 175
修羅場を踏んだ男の「アニマル・センス」 177
なぜ、晩年の西郷は判断ミスを犯したか 178
日本版ピューリタン革命を目指した西郷 181
学校出のエリートに潜む弱点 182
徹底的に議論をした明治の元勲 185
なぜ、昭和の日本から国家戦略がなくなったのか 187
現代日本の「お手本」は大正デモクラシーにあり 191
世界に誇るべき日本の民主主義 194
政治資金規正法が日本の政治家を駄目にする 197

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

四章　「尊敬される国」となるために……201

――明治の指導者が教える真の外交とは

驚くべき伊藤博文の洞察力　202
「皆の衆」国家アメリカ　203
弁論で負けた日本の戦前外交　206
ヒトラーも読み間違えた「アングロ・サクソンの原理」　207
ルーズベルト、チャーチルの策謀に乗ってしまった日本　210
「民主主義の怒り」こそ、最強の兵器　213
真珠湾攻撃を「闇討ち」にしたのは誰か　216
日米戦争は「ベトナム化」できた　220
外交センスに溢れていた明治の日本　222
日米経済摩擦を作ったのは誰か　227
「皆の衆」に語り掛ける外交こそ日本の課題　229
外交官の条件とは　232
明治維新を作った「教養」の力　233

このままでは日本は「内部崩壊」する　238
日本の製造業が中国・インドに破れる日　240
「無駄な勉強」をどれだけやったかで人間は決まる　242
「異分子」を許容する社会を　245
「眠れる獅子」日本　247
対談を終えて（岡崎久彦）　250

図版提供　毎日新聞社
産経新聞社
サンテレフォト
本文脚注作成　編集部

一章　「国家の品格」が、国民の運命を決める

――日本の繁栄回復のために、何をなすべきか

「国家の品格」を作るものとは

渡部　二十一世紀まで、もう数年を残すばかりになりました。来世紀の日本が、はたして繁栄を享受しつづけることができるかどうか――これにはさまざまな意見があると思いますが、私は基本的に「日本はますます繁栄するだろうし、また繁栄すべき運命を有した国である」と信じて疑いません。

ただ、そこには一つの前提条件があります。

それは、端的に言うならば、日本という国がこれから品格を取り戻すことができるか、ということです。

いかに経済的に豊かであっても、国としての品格がなければ、国際社会において尊敬されるわけがなく、したがって日本が国際的なリーダーシップを発揮することもできないと思うのです。

全盛期の大英帝国、あるいは現在のアメリカ合衆国が世界のリーダーたりうるのは、圧倒的なパワーと同時に、やはり何らかの品格を感じさせるからです。単に軍事力、経済力だけでは国際社会は動きません。どこか仰ぎ見られる

ようなところがなければ、いくらリーダーシップを取ろうと思っても無理な話なのです。

ところが、今の日本はどうでしょうか。

まことに残念なことですが、あまり仰ぎ見られているという感じではありません。資源小国であるにもかかわらず、これだけの経済規模の国を作りあげたというのに、日本の国際社会における存在感はけっして大きいとは言えない。ことに、いわゆるバブル経済が弾けてからは、ますます日本という国が軽く見られるようになった感じです。

しかし、かつての日本、ことに明治の日本には品格がありました。当時の日本は欧米列強に比べれば、まだまだ小国ではありましたが、それなりの存在感があった。個人レベルで見ても、日露戦争で活躍した東郷元帥や乃木将軍などは、一種の偉人として世界的に尊敬されておりました。

では、今の日本はどうして尊敬されなくなったのか。そして、どうやったら日本という国が世界から仰ぎ見られるようになるのか——このことについての大きなヒントが、十九世紀イギリスのサミュエル・スマイルズ*が書いた『品性

サミュエル・スマイルズ 1812〜1904年。スコットランド生まれ。エジンバラ大学で医学を学び，医者を開業するが，やがてジャーナリズムの世界に転身。伝記や人生論を数多く執筆した。母校エジンバラ大学の名誉法学博士(LL.D)を与えられたほか，イタリアなどからも勲章を受けた。

論』という本の中にあります。

スマイルズは、わが国でも『西国立志編』（原題『自助論』）の著者として有名な人であることは、あらためて言うまでもないでしょう。彼の『自助論』はイギリスでも「聖書の次に読まれた」と言われたほどのベストセラーですが、こと内容に関しては、この『品性論』のほうが充実していると私は思います。

さて、この『品性論』で彼は、次のように書いています。

「国としての品格は、自分たちは偉大なる民族に属するという感情から、その支持と力を得るものである。先祖の偉大さを受け継ぎ、先祖の遂げた栄光を永続させるべきだという風土がその国に出来上がったときに、国家としての品格が高まる」（渡部訳）

国家の品格は先祖への尊敬心に始まる――このスマイルズの指摘を今の日本に当てはめると、これはまことに心許ない状況ですね。

イギリスやフランスは経済力では日本の半分以下ですが、自分たちの先祖の業績に強い誇りを持ち、それを子どもたちにも教えています。それが外交などにおける自信にも、当然連なっているわけです。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com